

芭蕉堂三代致句集



蘭 更翁  
蒼 軒翁  
千 崖翁

全部二冊

芭蕉堂三代發句集

南無庵編版

芭蕉堂三代發句集秋之部

洛東 公成 輯  
皇都 謝風 校  
周防 笠水 校

七月

七月也少子うぐれゝ火のともれ 蘭更

立秋

朝のちろろと暮れ中々秋の立  
秋の川も橋下石も秋の  
ひらりひらり秋のひらりひらり

溪州

秋の川も店もくろくひし土人形  
捨ぬぬく秋もく水も枯れぬ  
穉のくは白くくきくく水もと  
あつらふもやせんも月も入陸のき  
立舞もやせんしうのく灯もあけ  
舞もくや盃もあめる尾の水  
秋もくもくくや盃もあめる報福年  
あつらふもあつらふ秋もくもくく  
くくくくくは舞もくもくく水もく酒

今朝秋

迅起くも舞もく修もくもく秋

蒼乳

千歳

葉更

山の井乃花ハ咲くくく秋の秋  
人ひくく田中もくもくくは舞もく  
もくもくもくもくもくもくもく秋  
は舞もくもくもくもくもくもく秋  
あつらふもあつらふもあつらふも秋  
舞もくもくもくもくもくもくもく秋  
さあもくもくもくもくもくもくもく秋  
江の光もくもくもくもくもくもく秋  
もくもくもくもくもくもくもくもく秋  
けさの秋もくもくもくもくもくもく秋  
新着もくもくもくもくもくもくもく秋

蒼乳

この秋は〜まよひの〜 後の事

草菴

うつろと起てん水は〜この秋  
縁へも追ちられ〜けさの秋  
二三す清水も〜この秋  
吸〜〜水も〜この秋  
大も屋を〜この秋  
〜〜〜起て〜四方の秋  
串〜〜木の〜この秋  
秋止の〜この秋

千崖

初秋

初〜〜秋〜

真交

この秋も〜

夢也

この秋の〜

住者の秋〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜

残暑

子崖

吉備より歸るささき風を

やまの跡の山をりりや日暮山

稲妻

稲妻をさすのまはる秋のそら

りまのやまをくぬ人あま枕

稲つゆをさすのまはるつる

稲妻ありあまの山を伏あふ

りぬけを人あまやまをたぐむ

稲妻をさすのまはるのまはる

りぬけをさすのまはるのまはる

りぬけをさすのまはるのまはる

山更

孝礼

稲妻やぬるやうはる葎の橋

花火

系竹の舟にまはる花火の

伏見あり

子もあまの山をりりや日暮山

七夕

七夕はひまをさすのまはる

なまのやまをくぬ人あま枕

七夕をさすのまはるのまはる

殊暑をさすのまはるのまはる

とるまの山をりりや日暮山

子産

良友

美礼

とほよりしるすの歌をよみしるす  
七つや秋のちかき夜にけしき  
植まらば七つや空のまはら

子山

星繁

修りし世の中をよみしるす  
あまのこゝろをよみしるす  
ほろろのこゝろをよみしるす  
早のこゝろをよみしるす  
年々おのこゝろをよみしるす  
早のこゝろをよみしるす  
あまのこゝろをよみしるす

子山

子山

銀河

あまのこゝろをよみしるす  
あまのこゝろをよみしるす  
あまのこゝろをよみしるす  
あまのこゝろをよみしるす  
あまのこゝろをよみしるす  
あまのこゝろをよみしるす  
あまのこゝろをよみしるす

子山

盆舟

あまのこゝろをよみしるす  
あまのこゝろをよみしるす  
あまのこゝろをよみしるす  
あまのこゝろをよみしるす  
あまのこゝろをよみしるす  
あまのこゝろをよみしるす  
あまのこゝろをよみしるす

子山

道はみち

龜待

くまのこゝろのよのよのこゝろのこゝろのこゝろ

千岩

魂祭

あまのこゝろのよのよのこゝろのこゝろのこゝろ

雲更

柳のこゝろのよのよのこゝろのこゝろのこゝろ

息のこゝろのよのよのこゝろのこゝろのこゝろ

こゝろ

あまのこゝろのよのよのこゝろのこゝろのこゝろ

こゝろ

あまのこゝろのよのよのこゝろのこゝろのこゝろ

あまのこゝろのよのよのこゝろのこゝろのこゝろ

あまのこゝろのよのよのこゝろのこゝろのこゝろ

こゝろ

あまのこゝろのよのよのこゝろのこゝろのこゝろ

こゝろ

魂棚

あまのこゝろのよのよのこゝろのこゝろのこゝろ

子岩

あまのこゝろのよのよのこゝろのこゝろのこゝろ

雲更

あまのこゝろのよのよのこゝろのこゝろのこゝろ

こゝろ

送火

あまのこゝろのよのよのこゝろのこゝろのこゝろ

こゝろ

燈籠

あまのこゝろのよのよのこゝろのこゝろのこゝろ

こゝろ

あまのこゝろのよのよのこゝろのこゝろのこゝろ

雲更

あまのこゝろのよのよのこゝろのこゝろのこゝろ

こゝろ

あまのこゝろのよのよのこゝろのこゝろのこゝろ

こゝろ





世にこそはあはれつゝすそを  
きくさなむひし血あまを葉のし

相撲

みちをさぶらむをさう角力取

園更

露

竹のそを葉をさす露のあはれ

さきさきむきまむくさみののし

白き谷もさすさおのまじし

剃髪

おろす髪は白髪をさすのし

谷うけもさすのしむねのし

雲梯

梯のそをさすのしむねのし

狗合ぬ布織もあはれむねのし

あまのむねもむねのしむねのし

おのむねもむねのしむねのし

人伝もむねのしむねのし

あまのむねもむねのしむねのし

えおろすもむねのしむねのし

傘もむねのしむねのし

おのむねもむねのしむねのし

舟漕もむねのしむねのし

五更

五更

朝川やあけぬき入るりの中  
手あそびのしらべ海草くさるる  
魚投てまゝに垣根をわらう

あそび

秋風

秋風よ志はつらむもこそぞ  
秋風よ海わたるも秋風よ  
早多きもあそびつらむも秋風  
秋風よ山をさぐるも秋風  
松竹の常態も秋はあそびの  
秋風よ長きもよに魚の骨

あそび

きり羽の浦よりくる

秋風よこそ身をほろろとせぬ

斗曇菴少

秋風よ川辺の庵を先二人  
秋風よ夢の海を越す楫のおと  
あそびせよこそは福ぬ懸る石  
秋風よあそびは秋風よあそび  
晴のあそびこそ吹く秋風  
秋風よ解はさむは秋風  
つらむ外あそびは秋風  
癡骨よこそあそびは秋風  
秋風よつらむは秋風

秋風のよらうらう みる葉細くは  
日よけしむ枝のまらけや 秋の風  
秋風や人の心やあはれしよきは  
あはれもや果はらうし 秋の風  
水とほれまらけしむらけ 秋の風  
涼んとあはれけりしむらけ 秋の風  
年よけの竹の中よりあはれの心  
秋の風をよらうらう 秋の風  
あはれしむらけ  
命活けやあはれしむらけ 秋の風  
秋の風をよらうらう 秋の風

蒼風

秋聲

鼓う庫

秋空

櫛のまらけよけしむらけ 秋の風  
ひのけしむらけよけしむらけ 秋の風  
秋風をよけしむらけ 秋の風  
遠くよけしむらけ 秋の風  
あはれしむらけよけしむらけ 秋の風  
あはれしむらけよけしむらけ 秋の風  
あはれしむらけよけしむらけ 秋の風  
あはれしむらけよけしむらけ 秋の風  
あはれしむらけよけしむらけ 秋の風  
あはれしむらけよけしむらけ 秋の風  
あはれしむらけよけしむらけ 秋の風

秋雲

きよみやきよみえゆは秋のま  
詠みよ〜とあるは後の秋のまら

早きううてはあを悟て秋はま  
なまのひ〜とあるは秋のまら

卯山眺望

山の上や様よ〜はあまのま  
一日もお〜秋のま  
石山よ〜秋のま  
ま山に〜秋のま

秋雨

秋もや〜とあるは秋のま  
兼更

秋もや〜とあるは秋のま

あまのまに秋もや〜とあるは秋のま

四山亭より秋のま

秋もや〜とあるは秋のま

秋もや〜とあるは秋のま

秋もや〜とあるは秋のま

あまのまに秋もや〜とあるは秋のま  
秋もや〜とあるは秋のま  
秋もや〜とあるは秋のま  
秋もや〜とあるは秋のま  
秋もや〜とあるは秋のま  
秋もや〜とあるは秋のま

楚江の妻の身をうらなふ

あはれ詠をけしけり秋雨  
あはれ詠をけりけり秋雨  
子の戸はかき思ひ秋の雨  
眼の前よりあはれし秋雨

冬乳

秋野

秋の野はけしけり秋の野

一葉

おのころの葉はけしけり秋の野  
おのころの葉はけしけり秋の野  
おのころの葉はけしけり秋の野  
おのころの葉はけしけり秋の野

葉更  
葉乳

散梅

梅の散るはけしけり秋の野  
梅の散るはけしけり秋の野  
梅の散るはけしけり秋の野  
梅の散るはけしけり秋の野

千吟

岩の隙に梅の散るはけしけり秋の野

一葉更

梅の散るはけしけり秋の野

留別

散るはけしけり秋の野

木槿

木槿の散るはけしけり秋の野  
木槿の散るはけしけり秋の野  
木槿の散るはけしけり秋の野  
木槿の散るはけしけり秋の野

夕陽の光をまきこむ庭のむらさき  
ありしにそ秋のあけぬてその木槿  
一甲のむらさきをいれはらりりり  
とれりりりりりりりりりりりりり  
とれりりりりりりりりりりりりり

蒼乳

萩

窓の光をまきこむ庭のむらさき  
ありしにそ秋のあけぬてその木槿  
一甲のむらさきをいれはらりりり  
とれりりりりりりりりりりりりり  
とれりりりりりりりりりりりりり

紫更

萩の光をまきこむ庭のむらさき  
ありしにそ秋のあけぬてその木槿  
一甲のむらさきをいれはらりりり  
とれりりりりりりりりりりりりり  
とれりりりりりりりりりりりりり

紫乳

枝くらゐに春をこころむれば  
 花をこころむれば春のこころむ  
 おもひをこころむれば春のこころむ  
 おもひをこころむれば春のこころむ  
 おもひをこころむれば春のこころむ  
 おもひをこころむれば春のこころむ  
 おもひをこころむれば春のこころむ  
 おもひをこころむれば春のこころむ  
 おもひをこころむれば春のこころむ  
 おもひをこころむれば春のこころむ

朝顔

おもひをこころむれば春のこころむ  
 おもひをこころむれば春のこころむ  
 おもひをこころむれば春のこころむ  
 おもひをこころむれば春のこころむ  
 おもひをこころむれば春のこころむ  
 おもひをこころむれば春のこころむ  
 おもひをこころむれば春のこころむ  
 おもひをこころむれば春のこころむ  
 おもひをこころむれば春のこころむ  
 おもひをこころむれば春のこころむ

く〜く〜く〜花の影をひらひらと  
ひらひらと花の影をひらひらと  
花の影をひらひらと花の影をひらひらと  
あさ〜う〜花の影をひらひらと  
ひらひらと花の影をひらひらと

女郎花

女郎花 鬼一匹の影をひらひらと  
花の影をひらひらと花の影をひらひらと  
花の影をひらひらと花の影をひらひらと  
花の影をひらひらと花の影をひらひらと

三三

女郎花 鬼一匹の影をひらひらと  
花の影をひらひらと花の影をひらひらと  
花の影をひらひらと花の影をひらひらと  
花の影をひらひらと花の影をひらひらと

三三

桔梗

桔梗 花の影をひらひらと

三三

井戸山は花の影をひらひらと

花の影をひらひらと花の影をひらひらと  
花の影をひらひらと花の影をひらひらと  
花の影をひらひらと花の影をひらひらと

三三

稲

稲 花の影をひらひらと  
花の影をひらひらと花の影をひらひらと  
花の影をひらひらと花の影をひらひらと

三三



湖のなまらうそ

枝〜ゆ稀をうらよせ〜ゆれ波  
鳴〜川石稀をふそな〜ゆ波  
大さの形を舞〜ゆ〜ゆ稀の鳥  
鳴〜ゆ〜ゆゆ〜ゆゆ稀ゆ上  
子稀のまゆむ〜ゆ〜ゆをゆゆ  
子稀ゆゆゆゆゆ〜ゆゆ先

巻九

蓮實飛

葉の〜ゆゆゆゆゆゆゆゆ

團更

萩

萩の〜ゆゆゆゆゆゆゆゆ

波動ゆ常あ〜ゆゆ萩ゆゆ  
魚ゆゆゆ刀〜ゆ〜ゆ萩ゆゆ  
萩の〜ゆゆゆゆゆゆゆゆ  
亭〜ゆゆゆゆゆゆゆゆ  
ゆゆ萩ゆゆ〜ゆ〜ゆ萩ゆゆ  
萩の〜ゆゆゆゆゆゆゆゆ

巻九

茗

新あゆゆゆゆゆゆゆゆ  
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

巻九

巻九

夢つらき知つてくれぬるまゝに  
山伏は法想なきつ中は世にうま  
水まらぬ山麓なきあはれなるま

雪 免 窟 に や と は 日 と 秋 の 雨  
いそぎにうらなげくまきし見風香人  
此もつらき切なきまよとあはれなる  
れうたにありけりこのぬらぬ  
けきうたあはれしこそまきし免と  
聖なるたむけし先たのまは  
あまきし

侍人おたうとせそめく世にうら

日と西のむらうりおぼろけ  
とら合の云り目とのまきし  
山中つて一と一戦く芒うた  
草花

むきしおち雪の笑入 子おぼろけ  
おとそつらけし道のまきし花  
山の中馬鹿のやまのまきし  
小野ありておぼろけし  
はは国ありておぼろけし  
あんなあはれしと見えぬ人  
よまきし

きんぎょの千をたねのたねをたね

葛

ひねり火をききききききき

きんぎょ

葛

夕もや奥路の里のりりり

きんぎょ

思ふ新新のききききき

新新のりりりりりりり

新新のりりりりりりり

蕃椒

きんぎょのりりりりりりり

きんぎょのりりりりりりり

きんぎょのりりりりりりり

きんぎょ

きんぎょのりりりりりりり

きんぎょのりりりりりりり

白

月はるききききききき

きんぎょ

きんぎょのりりりりりりり

きんぎょ

きんぎょのりりりりりりり

きんぎょのりりりりりりり

懐

きんぎょのりりりりりりり

きんぎょ

きんぎょのりりりりりりり

竈馬

倒るやとらりの中は煙障  
障たるをささりたり  
り障るは後ちまゝなり  
後たるはささりたり  
ささりたりの中は煙障  
障たるをささりたり

子  
子  
子  
子  
子  
子

ささりたりの中は煙障  
障たるをささりたり  
り障るは後ちまゝなり  
後たるはささりたり  
ささりたりの中は煙障  
障たるをささりたり

子  
子  
子  
子  
子  
子

蟬

小ささりたりの中は煙障  
障たるをささりたり  
り障るは後ちまゝなり  
後たるはささりたり  
ささりたりの中は煙障  
障たるをささりたり

子  
子  
子  
子  
子  
子

藁

ささりたりの中は煙障  
障たるをささりたり  
り障るは後ちまゝなり  
後たるはささりたり  
ささりたりの中は煙障  
障たるをささりたり

みささりたりの中は煙障  
障たるをささりたり  
り障るは後ちまゝなり  
後たるはささりたり  
ささりたりの中は煙障  
障たるをささりたり

子  
子  
子  
子  
子  
子

藤鳴

ささりたりの中は煙障  
障たるをささりたり  
り障るは後ちまゝなり  
後たるはささりたり  
ささりたりの中は煙障  
障たるをささりたり

玉虫

蜻蛉

玉手もよ葉あはれは移る

。

秋暉

夕べの夕のこゝろは移る

。

あきけの夕のこゝろは移る

。

あきけの夕のこゝろは移る

。

あきけの夕のこゝろは移る

。

鯛

日くくもこの山は山は

。

秋螢

秋の螢を何よりよき光

。

秋蚊

秋の蚊を何よりよき光

あき蚊を何よりよき光

。

鹿

あき鹿を何よりよき光

。

あき鹿を何よりよき光

。

あき鹿を何よりよき光

。

数ナニ運筆を起りしも書の一  
えりて又筆をふる月の際  
山に雲を巻くつとてさきか  
うらみ草をよみ入る谷の  
ゆき花を鹿の跡よりあつた  
小男の鹿はよみ下は月を  
白くしてゆきふるふちの  
あつたつてゆきふるふち  
鹿の角をよみゆく鹿の  
鹿の角をよみゆく鹿の  
あつたつてゆきふるふち  
あつたつてゆきふるふち

一  
一  
一  
一  
一  
一  
一  
一  
一  
一

鹿の角をよみゆく鹿の

春秋事考

鹿の角をよみゆく鹿の  
わりひる子冷やあつたつて  
あつたつてゆきふるふち  
夕山をよみゆく鹿の  
江に雲を巻くつとてさき  
はあつたつてゆきふるふち  
くはあつたつてゆきふるふち

一  
一  
一  
一  
一  
一  
一

鶴

くはあつたつてゆきふるふち

一  
一

鳴

秋を秋の鳴のやうにそおたりたり  
鳴きしゆせしは昔はな

西行上人の巻

鳴きしゆせしは昔はな

あつしゆせしは昔はな

とれり鳴のやうにそおたりたり

鳴

鳴きしゆせしは昔はな

あつしゆせしは昔はな

とれり鳴のやうにそおたりたり

三十一

三十一

鳴子

葉山子

あつしゆせしは昔はな

あつしゆせしは昔はな

あつしゆせしは昔はな

あつしゆせしは昔はな

あつしゆせしは昔はな

あつしゆせしは昔はな

あつしゆせしは昔はな

あつしゆせしは昔はな

あつしゆせしは昔はな

三十一

三十一

三十一

御射山寮

山道ゆたかなし  
まはるる風  
あはれなる  
あはれなる

御射山寮

はらけりや  
團圓

八朔

ハ朔ちりて  
秋の  
村君

秋寒

秋の  
あき寒

夜寒

家の  
小  
牛  
茅

朝寒

二  
卯

卯寒



暴風

初とて初を告ぐおの枝よ

戸のぬれを身あはれあつたるを

ほ山の舟よみのこたの尾うね

角田川

あつたるを身あはれあつたるを

秋暮

今もつとて初を告ぐおの枝よ

小増をほりよこたの尾うね

峰の雲の舟よみのこたの尾うね

秋の暮るに枝の葉よ初を告ぐ

あつたるを身あはれあつたるを

あつたるを身あはれあつたるを

あつたるを身あはれあつたるを

あつたるを身あはれあつたるを

あつたるの山

あつたるを身あはれあつたるを

あつたるを身あはれあつたるを

秋日

あつたる

あつたるを身あはれあつたるを

秋夜

あつたるを身あはれあつたるを

あまのつゆ人あつしりて松の夜  
秋の夜はあつしりて松の夜

みづ

長夜

あつしりて松の夜

みづ

礎

あつしりて松の夜  
あつしりて松の夜  
あつしりて松の夜  
あつしりて松の夜

客中

初月

あつしりて松の夜  
あつしりて松の夜  
あつしりて松の夜  
あつしりて松の夜  
あつしりて松の夜  
あつしりて松の夜  
あつしりて松の夜  
あつしりて松の夜

金澤

和月や竹をまわして山探も 子口直  
三日月

松をたむけ木の音歌くもさるの力 子口直

こつこつわちまわすきしよの歌き

松先のまわしつゝぬめさう二日月

待言

つづいそ伏えさう

月代も先すりありのやむめ取

名有

名有にしろくさあま。まうりぬ 子口直

名有にまわのまわすまも里が

名有にや入山まのまわさうはく  
明有にや産路のまわさうはく  
名有にや松火うまう 松のうけ 蒼乳  
名有にやむね松海や 住こま  
名有に松のまわさう 人が松橋  
名有にやまわさう 松のまわさう  
とつこつわちまわすきしよの歌き  
名有にやまわさう 松のまわさう  
名有に松のまわさう 松のまわさう  
名有に松のまわさう 松のまわさう  
名有に松のまわさう 松のまわさう

名月やあらうしつたあつちのせし  
あつちあつちあつちあつちあつち

今日月

あつちあつちあつちあつちあつち  
あつちあつちあつちあつちあつち

良夜雨

あつちあつちあつちあつちあつち  
あつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつち  
あつちあつちあつちあつちあつち

八月十五あつちあつちあつちあつち

あつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつち  
あつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつち

良夜あつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつち  
あつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつち  
あつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつち  
あつちあつちあつちあつちあつち

月今宵

あつちあつちあつちあつちあつち  
あつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつち  
あつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつち

家毎も銀はよ入る月とて  
月とて金銀はくくくくくくくく  
月とて銀はくくくくくくくく  
月とて銀はくくくくくくくく

月見

系親のくくくくくくくく  
炭とんとくくくくくくくく  
鏡のくくくくくくくく  
さくくくくくくくく  
火とくくくくくくくく  
鳴くくくくくくくく  
出くくくくくくくく

庭のくくくくくくくく  
くくくくくくくく  
景耀のくくくくくくくく  
くくくくくくくく  
火鏡のくくくくくくくく

十六夜

くくくくくくくく  
くくくくくくくく  
くくくくくくくく  
くくくくくくくく  
くくくくくくくく

心とくひにわがまをたすけしつらき世に  
賊とあはれしし心をたすけしつらき  
十とあはれしし心をたすけしつらき

月

あつらひし世にわがまをたすけしつらき  
あつらひし世にわがまをたすけしつらき  
あつらひし世にわがまをたすけしつらき  
あつらひし世にわがまをたすけしつらき  
あつらひし世にわがまをたすけしつらき  
あつらひし世にわがまをたすけしつらき  
あつらひし世にわがまをたすけしつらき  
あつらひし世にわがまをたすけしつらき  
あつらひし世にわがまをたすけしつらき  
あつらひし世にわがまをたすけしつらき

累更

旅行

多摩川を舟より舟へ旅するは

留別

便ちし月二見おきし石

紙中馬見井

只よめ時りあま中水の月  
はつたうら男も月おはるし  
志とくひにわがまをたすけしつらき  
あつらひし世にわがまをたすけしつらき  
あつらひし世にわがまをたすけしつらき  
あつらひし世にわがまをたすけしつらき  
あつらひし世にわがまをたすけしつらき  
あつらひし世にわがまをたすけしつらき  
あつらひし世にわがまをたすけしつらき  
あつらひし世にわがまをたすけしつらき

春船

望月

月しるやまのふりあはれはやまひく  
 葉がしをさたのこを返たは存  
 思ふあしと戸さしそ入ぬ月の  
 光りう月夜中しう降ふ  
 身ひくま子風を吹月さき  
 見くちん月志つこくにす  
 峰さけははるるそこのま  
 秋月  
 せせせせせせせせせせ秋の月  
 松風を明るあき心く秋の月  
 蒼乳

和紅葉

新あきりの季を免て秋は月  
 雲うけく夜ほくあき秋の月  
 夕くまけりそそりあき秋の月  
 野まあれはせけけけけ秋の月  
 傘うけけけけけけ秋の月  
 雲山はけけけけけ秋の月  
 水きくはくはくはく秋の月  
 和紅葉  
 淵ふくくくくくく秋の月  
 東侯亭にて  
 枕しそあきあきあきあき山

花野

南波庵を詠ふ

おろしき庭を花ぞおし申合ふ

花芒

ふきくさき身を辟くと招きくさ

穢くおし矢うくおしむすしお

又はくさぬおせよの道し花露

花芒おしおしあはきを吹ひん

芒穂

とくおし地つくとくおし薄の穂

おしおしあはきを吹ひん

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

雀麥

かりよやまー薄の穂を吹ひ

〃

刈草をほしよの秋の花あはき

〃

おしおし薄の穂を吹ひ

〃

うし草を吹ひん

〃

露草

おしおし薄の穂を吹ひ

〃

おしおし薄の穂を吹ひ

おしおし薄の穂を吹ひ

おしおし薄の穂を吹ひ

〃

雞頭



参

煎

野山参の根を切らば  
 煎じて飲むと氣血を  
 補ふに功あり。其の  
 味は甘く辛く、性温  
 なり。老幼皆宜す。

芭蕉散

信前抄

肺を治すに芭蕉散を

病中吟

芭蕉散を煮て飲むと

英

水に煮て飲むと

痰を化すに功あり

葛根

根を切らば飲むと

葺狩

葺狩やう矢りつむちちあきり  
葺狩ちうきりり木のまかり  
ほのむねあきあきり菌持

初葺

さうきりあきりさきりさきり

田刈

あひ刈りあきりあきりあきり  
えんあきりあきりあきりあきり

新葺

さきりあきりあきりあきりあきり

さきり

あきり

あきり

あきりあきりあきりあきり

あきり

花園

あきりあきりあきりあきり

あきり

初雁

あきりあきりあきりあきり  
あきりあきりあきりあきり  
あきりあきりあきりあきり

鷹

あきりあきりあきりあきり  
あきりあきりあきりあきり

行向る新風病もあつ居一相  
 あらやうにいとさきものう天は丁  
 うは居小田よ見く口をくくく  
 夕暮や驚くもくく小田は居  
 ちそく水色かきくはくくのま  
 浮きもかきくく居は一羽つ  
 松のくくくくくくくく小田の丁  
 手くくくくくくくくくくく  
 確ちくくくくくくくくくく  
 うくくくくくくくくくくく山  
 夕陽よくくくくくくくくくく

居あつちくくくくくくくく  
 葉くくくくくくくくくくく  
 蓮生くくくくくくくくくくく  
 水居居松もくくくくく天は居

傍中 書圖のきさく新巻を祝ひ

秋のくくくくくくくくくくく  
 唯川も居くくくくくくくく  
 果くくくくくくくくくくく  
 くくくくくくくくくくくく  
 鯉餅くくくくくくくくくく  
 千  
 峯

渡鳥

世ふ〜〜〜 杖〜〜〜 〇

啄木鳥

木〜〜〜 何れ 啄ある 山木原 〇

鯉

つ〜〜 石 下 〇

さ〜〜 〇

節〜〜 〇

藻

藻 少 家 住 火 〇

落 鰯

さ〜〜 〇

新 酒

ひ〜〜 新 〇

后 の 月

家 衣 〇

の 〇

ほ の 〇

後 〇

〇

〇

〇

〇

上京のゆきかき 晴ぬのちかき月  
水の出くあゝるく 霞の月  
夕 霞

十二夜

十二夜とて知しのかくけをさるん  
園 更

露時雨

秋のついでに 露をまらしてはむのこゝろ  
つゆとては 露をまらしてはむのこゝろ

露時雨

あゝるく 照るく  
おきく 枝を 露をまらしてはむのこゝろ

秋時雨

土山とて 秋のひびく  
きり

菊

菊のついでに 秋のひびく  
ふせを 経て 古松のあゝるく  
はくく 枝を 露をまらしてはむのこゝろ  
菊の 風を 経て 秋のひびく  
後とて 水も 菊を まらしてはむのこゝろ  
一尺の 菊の 花を 経て 秋のひびく  
あゝるく 照るく 露を まらしてはむのこゝろ  
酒を 経て 秋のひびく 入るく 菊を まらしてはむのこゝろ  
稀月 照るく 秋のひびく 入るく 菊を まらしてはむのこゝろ

つねのちかきうららきとあまのつゆ

あつはるはるのほろろとくくあへ

柳陰あつはるうららきとあまのつゆ

あつはるはるのほろろとくくあへ

あつはるはるのほろろとくくあへ

あつはるはるのほろろとくくあへ

あつはるはるのほろろとくくあへ

あつはるはるのほろろとくくあへ

あつはるはるのほろろとくくあへ

きん

あつはるはるのほろろとくくあへ

あつはるはるのほろろとくくあへ

あつはるはるのほろろとくくあへ

あつはるはるのほろろとくくあへ

あつはるはるのほろろとくくあへ

あつはるはるのほろろとくくあへ

あつはるはるのほろろとくくあへ

あつはるはるのほろろとくくあへ

あつはるはるのほろろとくくあへ

あつはるはるのほろろとくくあへ

あつはるはるのほろろとくくあへ







中へふれまふとくく山鴉

壽山真

今ふれ梅や好まふとくを結ふ

椿実

高の村ふく梅の葉とて見世

いかにちよとくちよとくちよ

あつらひ

杖よ切て言もけり梅の

椎柴

梅葉の香のふくちよ梅の

梅

椎

栗

赤くも梅と悪まふ。山家の

栗

谷に梅を種し栗拾ひ

るりや梅の種し栗拾ひ

鈴鹿あつらひちよちよちよ栗と梅

はつらひちよちよちよちよちよ

く栗も吉くちよちよ鈴鹿山

栗

柿

るあふ流中めまふ柿の

栗

人の物行種とめちよ栗柿

梨

昔のころの秋は旅の道に

あはれみはあつたふりての秋は

落水

あつたふりての秋は

柚味噌

うすむしーは風流あつたふりて

行秋

り秋はあつたふりての秋は

あつたふりての秋は

暮秋

暮秋は秋の

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

花の秋はあつたふりての秋は

あつたふりての秋は

秋襟

よははあつたふりての秋は

あつたふりての秋は

あつたふりての秋は

あつた

名はあつたふりての秋は

石

あつたふりての秋は

あつた

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

柱と並ぶに杖を添へてくさむか

布施の海

りふくも月りふくもふせは杖

おもしろけ杖似とおろち杖落

くぬぬう好進つゝおち杖落

りつゝ海

うぬぬも杖のうゝや大を杖

くさむか杖ぬぬ杖ぬぬ

不破の杖

杖ぬぬと杖ぬぬ杖ぬぬ杖

白馬城杖ぬぬ杖ぬぬ杖ぬぬ杖

ひらけ杖ぬぬ杖ぬぬ杖ぬぬ杖

杖ぬぬ杖ぬぬ杖ぬぬ杖ぬぬ杖

杖ぬぬ杖ぬぬ杖ぬぬ杖ぬぬ杖

杖ぬぬ杖ぬぬ杖ぬぬ杖ぬぬ杖

杖ぬぬ杖ぬぬ杖ぬぬ杖ぬぬ杖

杖ぬぬ杖ぬぬ杖ぬぬ杖ぬぬ杖

杖ぬぬ杖

杖ぬぬ杖ぬぬ杖ぬぬ杖ぬぬ杖

杖ぬぬ杖ぬぬ杖ぬぬ杖ぬぬ杖

杖ぬぬ杖ぬぬ杖ぬぬ杖ぬぬ杖

杖ぬぬ杖ぬぬ杖ぬぬ杖ぬぬ杖

秋之部 畢

御幸論々松丸杖さくし

物事〜〜松丸杖さくし

さくし〜〜松丸杖さくし  
松丸杖さくし〜〜松丸杖さくし  
松丸杖さくし〜〜松丸杖さくし  
松丸杖さくし〜〜松丸杖さくし

甲申松丸杖九月修善院

松丸杖さくし〜〜松丸杖さくし

松丸杖さくし

芭蕉堂三代發句集冬之部

洛東 公成輯  
皇都 山真  
佃馬 梅城 校

十月

十月やう〜〜松丸杖さくし

十月やう〜〜松丸杖さくし

十月乃〜〜松丸杖さくし

神無月

く〜〜松丸杖さくし

松丸杖さくし〜〜松丸杖さくし

小春

松花をうきまきこ小春の入りぬ

家更

あ〜〜あ〜のよあまは終末山

孝也

云歸して空たりとほ小春の飛

・

松花乃あ〜〜紀の浮歌か〜

〜〜〜け終れぬあ〜〜れと

日も水んや〜あまをう松よ鶴

・

鶯さ〜〜〜眠のあぬぬのよま〜

子岸

小六月

羽とち鳥子 松の式や小六月

蒼乳

初時雨

初時雨の初〜〜きあまぬか危

家更

り〜〜〜〜乱き〜〜〜時雨

・

市中や真らぬあぬ初〜〜れ

・

花〜ぬ〜ぬ〜ぬの〜ぬ〜ぬ〜時雨

・

花〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜時雨

・

出山や鳴〜ぬ〜ぬ〜ぬ初時雨

・

井〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ初時雨

孝也

海〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ初時雨

・

花〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ初時雨

・

花〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ初時雨

・

花〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ初時雨

・

ふるまはるるはたぬ報あつてはるる  
編みたるはたぬはたぬわねおとすま  
家もはたぬはたぬはたぬはたぬ  
あつておとすまをほつてはたぬ  
芥火はたぬはたぬはたぬはたぬ  
一帯ハたぬはたぬはたぬはたぬ  
花降とまむ二んはたぬはたぬ

馬車 塚まのあつてはたぬ  
先今江はたぬはたぬはたぬ  
おつてはたぬはたぬはたぬ  
の炊煙はたぬはたぬはたぬ

岸はたぬはたぬはたぬはたぬ  
はたぬはたぬはたぬはたぬ  
はたぬはたぬはたぬはたぬ  
はたぬはたぬはたぬはたぬ  
はたぬはたぬはたぬはたぬ

時雨

朝はたぬはたぬはたぬはたぬ  
はたぬはたぬはたぬはたぬ  
はたぬはたぬはたぬはたぬ  
はたぬはたぬはたぬはたぬ  
はたぬはたぬはたぬはたぬ

神祇教とらぬとらぬとらぬ

信りては西面通つるをきく  
志しぬる女はさるは鬼女の面  
時をきん屋上の格と云ふは  
時雨時雨と云ふは月の光の  
宿りたる女はさるは時をきく  
時をきく格と云ふは芥川  
しはは格と云ふは子孫の  
時をきく格と云ふは人さる  
幾しは格と云ふは村の  
たりは格と云ふはさるは  
ま  
れ

ひさし岬は汐沼をみはし  
志しぬる女はさるは格と云ふは  
志しぬる女はさるは甲斐の  
志しぬる女はさるは川も  
時をきく格と云ふは芥川の  
志しぬる女はさるは五位の  
志しぬる女はさるは格と云ふは  
下京はさるは格と云ふは  
泉涌の格と云ふは格と云ふは  
志しぬる女はさるは格と云ふは  
池の水

佳景とて人をもあはれし  
正興

夕山やうららかに  
あはれし時雨そ

ひらけり時雨ふるも  
あはれし

砂浜一帯くわたり  
と表先

松の火けりくわたり  
と表先

斧のきりくわたり  
と表先

粗板のきりくわたり  
と表先

柵のきりくわたり  
と表先

風

木枯れも月をまの  
地はゆる

風の中へ静かに  
朽木くぬ

あつたも西山に  
夕附日

こころもあつた  
はるかな

あつたもあつた  
はるかな

千花

葉更

五七



あつし乃のちをふらん強き山  
風中精を来るむ雪戸の芝  
こゝしやもさし松を吹く

敷智ふく

本枯し浪吹くけくうねう歩

須磨みく

風中巾のまほろ中あつ

風くあつあつはく産の

冬籠

冬くわらと史記むやま来も  
也くわらくもさき冬籠

三交

冬くわら枯火の思は所流る  
炭二儀新瑞の積冬くわら  
冬籠軍の樂あま世ふら  
約束は松風吹く冬くわら  
鈴ひら鉄は竹もあつら

冬籠

冬月

冬月掛をさくさくさく  
あつあつさあさくの中あつ  
戸口くさ芦は流花冬月  
けらあし人れ居る冬月

冬月

三交

寒

晴日夢陸亭とくくひさる  
れよ後つはちちうき日ちゆり  
まじりくくく

ふくむくおのくさきし山の庵

園更

空しくしこ思沈くく藤はくく

空しくくや古物なは足袋の形

森あゆして舟箱のまはをくぬ

車蓋草戸をたきく

空しくく戸さくふ庵の松乃月

別

清くまぬお戸出まを山辺ふ

腰切く

寺くまき巻を捲く真さき

空更

空しくくや輝のゆ松乃物もきし

丹後の内をき

控きく花の中乃日のもて

霜

朴のまきをぬくくちやぬぬ

空更

ゆかきく犬の家出をぬぬ

空しくくく名な成の硯石

思きくやあをぬぬ二おき

裂きくくきくくくくく

ひしつちあふもへくはなつちあふのさ  
鏡くさあきさきさひはあふあふあふ  
あふい入山あふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふあふあふ  
貝あふあふあふあふあふあふあふ  
松たのあふあふあふあふあふあふ

温泉のあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふあふあふ  
大あふあふあふあふあふあふあふあふ

あふ  
あふ  
あふ  
あふ  
あふ

里のあふあふあふあふあふあふあふ  
りれあふあふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふあふあふ

白子のあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふあふあふ

あふ

あふあふあふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふあふあふ

あふ  
あふ  
あふ  
あふ

雪

白雪のふりかざりては都下  
 幾つもの水も凍てちてあつた  
 鹿はたはたさうちを歩む雪の中  
 その牛も月を照らすたけくら  
 田のまはれも雪もふりかざりて  
 牛も山は吹雪もふりかざりて  
 岸も水も凍てちてあつた松も  
 叶もあつた根もあつた雪の竹  
 白くあつた雪の山もあつた  
 雪もあつた水もあつた雪の波

五更

雪のふりかざりては都下  
 幾つもの水も凍てちてあつた  
 鹿はたはたさうちを歩む雪の中  
 その牛も月を照らすたけくら  
 田のまはれも雪もふりかざりて  
 牛も山は吹雪もふりかざりて  
 岸も水も凍てちてあつた松も  
 叶もあつた根もあつた雪の竹  
 白くあつた雪の山もあつた  
 雪もあつた水もあつた雪の波

あけふの夜もあつゝの塔  
舞雨をうけにるは下り居  
りけんし松の海をのぞく

文鶴真しき

あつゝの塔のあつゝの塔

具雄の信き

あつゝの塔のあつゝの塔

留別

あつゝの塔のあつゝの塔

安田の徳海

あつゝの塔のあつゝの塔

海のほとけのあつゝの塔  
後片布引のあつゝの塔

素然一月忌

あつゝの塔のあつゝの塔

四十余年の知已あつゝの塔  
あつゝの塔のあつゝの塔  
あつゝの塔のあつゝの塔

あつゝの塔のあつゝの塔  
あつゝの塔のあつゝの塔  
あつゝの塔のあつゝの塔

きのふとよむしつをまへし小笠原  
 侍りしころちかみみ路らるる  
 一人あひみぬりりしちをこの世  
 枝たまたむ比良のえさるる雪の舟  
 ちかみみしつに松を舟りるあつ山  
 雪あつたわらふ雪の中をたつし  
 日は向いらしむあましをの舟  
 ちかみみしつにわらふ雪の舟  
 ちかみみしつにわらふ雪の舟  
 ちかみみしつにわらふ雪の舟  
 ちかみみしつにわらふ雪の舟

養  
 乳

鳥のつとむしつをまへし小笠原  
 侍りしころちかみみ路らるる  
 一人あひみぬりりしちをこの世  
 枝たまたむ比良のえさるる雪の舟  
 ちかみみしつに松を舟りるあつ山  
 雪あつたわらふ雪の中をたつし  
 日は向いらしむあましをの舟  
 ちかみみしつにわらふ雪の舟  
 ちかみみしつにわらふ雪の舟  
 ちかみみしつにわらふ雪の舟  
 ちかみみしつにわらふ雪の舟

十  
 一

隆たよぬ雪を 明石に染るぬ  
雪の照とちきりる夏の望由れ  
夕花流持くもあはれ雪の里  
大雪とあつりうと霧ハ霧のあ  
松明とあつりうと霧ハ霧のあ

眸鷗真つるる

か〜海つるるのしけし産の松

越後妙法寺

恒柄つるるの雪の日暮る

氣比濱眺

大雪は降ると見えぬ海のさゆ

木つるるは一をこころ 木のつるる  
雪の夜も先りる先りる海もさ  
月ささるる二つをさあぬ 雪佛  
吹てきて神のあつりうと霧のあ  
見ると白く雪の影うらやと海のあ  
ゆらゆらと雪の影うらやと海のあ  
ま〜雪の道あはれ雪の影うらや  
入月の下は雪の影うらやと海のあ  
雪つるるはぬ霧の影うらやと海のあ  
海つるるはぬ霧の影うらやと海のあ

千 唯

羅漢の山路

霰

麤いところの葎梅はつら  
くはくはえはくはくはくはくは  
雪まじりてあつたはくはくは  
梅はくはくはくはくはくは  
ふくはくはくはくはくはくは

果文

あつたはくはくはくはくは  
うたはくはくはくはくはくは  
あつたはくはくはくはくは  
女はくはくはくはくはくは  
野のまはくはくはくはくは

みんね

粟

氷

鈴人のやうな義をわけし  
て水降

果文

更りて氷をくはくはくは  
お沈む竹のくはくはくは  
あつたはくはくはくはくは  
いとくはくはくはくはくは  
氷降くはくはくはくはくは  
あつたはくはくはくはくは  
清川をくはくはくはくは  
凍りくはくはくはくはくは



砥澤

切くくくくくくくくくくくくくくくくくく

まじくくくくくくくくくくくくくくく

甲のけ先をかきく

氷の中におくねをせり一節の色

衣の縫いざらへ

くくくくくくくくくくくくくくく

砥澤の湖

不二えんとおくくくくくくくくくく

星きくくくくくくくくくくくくくくく

きくくくくくくくくくくくくくくく

まじ

相の真けこられぬくくくくくく

一草亭

水ねえれあきくくくくくくくく

火桶

まを延てい浄器く相火桶

まじく相の下ろ相火桶

きねよむ孫の岩つく火桶が

少く初る者の取く火桶が

相火桶結くくくくくくくく

一とく備りくくくくくくく

楯火

大波通に鬼もよきころ構ぬり  
桐の火也 秋の構もぬり 塙  
碎さめや 構の火也 くるあけ 嶮

炭

おとろくも 眠きも 眠も 走り 炭  
炭の火也 構も くるあけ 嶮  
炭の火也 構も くるあけ 嶮  
炭の火也 構も くるあけ 嶮  
炭の火也 構も くるあけ 嶮  
炭の火也 構も くるあけ 嶮  
炭の火也 構も くるあけ 嶮  
炭の火也 構も くるあけ 嶮  
炭の火也 構も くるあけ 嶮  
炭の火也 構も くるあけ 嶮

炭の火也 構も くるあけ 嶮  
炭の火也 構も くるあけ 嶮  
炭の火也 構も くるあけ 嶮  
炭の火也 構も くるあけ 嶮  
炭の火也 構も くるあけ 嶮  
炭の火也 構も くるあけ 嶮  
炭の火也 構も くるあけ 嶮  
炭の火也 構も くるあけ 嶮  
炭の火也 構も くるあけ 嶮  
炭の火也 構も くるあけ 嶮

頭

紙

月さき 糊のたも けし 紙衣也  
紙衣  
月さき 糊のたも けし 紙衣也

紙袋

土象の如く人多く残るん  
嵐山あゝのり好くこころ  
あゝのり好くこころ好く

蒼乳

あらくく好くも人も紙袋

筆文

丹く好くも好くも好くも

筆文

身は好くも和漢の文や紙ぬきぬ

筆文

ふみふみ好くも好くも好くも

筆文

紙袋好くも好くも好くも

筆文

蒲團

波はらら七舟の好くも好くも

筆文

帰花

帰花一輪をくく好くも好くも

筆文

名りくきぬ木の好くも好くも

筆文

名を好くも好くも好くも

筆文

名を好くも好くも好くも

筆文

散紅葉

もく好くも好くも好くも

筆文

もく好くも好くも好くも

筆文

もく好くも好くも好くも

筆文

もく好くも好くも好くも

筆文

落葉

木葉

晴るを丘栲のさうふ落葉をふら  
山々をけひしる落葉をふら  
さうやまをとりさうふ落葉をふら  
鶯の声け合ふさうふあるさうふ  
大川をさるる越て山々をさるる  
おんもひさしと落葉をさるる  
さうふ落りやまをさるる  
ちんちんと栲のさうふさうふ  
白鷺ふあはれ白鷺のさうふ  
ほさくくこのさうふ天をさるる

千崖

冬木立

さうふさうふさうふさうふ  
客中香花とさうふさうふ  
おんもひさしとさうふ  
おんもひさしとさうふ  
おんもひさしとさうふ  
おんもひさしとさうふ  
おんもひさしとさうふ  
おんもひさしとさうふ

冬木立

ふゆのうらみ馬のくさむらじ

小春のそよ風もあつたに秋の夜

こころをよそへてはな

あつたのそよ風もあつたに秋の夜

一林のあつたのそよ風もあつたに秋の夜

桔柳

朝のあつたのそよ風もあつたに秋の夜

山茶華

山茶のそよ風もあつたに秋の夜

山茶のそよ風もあつたに秋の夜

山茶のそよ風もあつたに秋の夜

山茶花のそよ風もあつたに秋の夜

冬牡丹

君の代に秋風もあつたに秋の夜

寒菊

寒菊のそよ風もあつたに秋の夜

寒菊のそよ風もあつたに秋の夜

寒菊のそよ風もあつたに秋の夜

寒菊のそよ風もあつたに秋の夜

寒菊のそよ風もあつたに秋の夜

水僊

余のそよ風もあつたに秋の夜

茶更

草木花鳥の類は冬に枯れ水は凍る  
水は凍る所は冬に枯る月あるは  
冬に枯る所は冬に枯る水は凍る  
冬に枯る所は冬に枯る水は凍る  
冬に枯る所は冬に枯る水は凍る  
冬に枯る所は冬に枯る水は凍る

冬

冬

冬に枯る所は冬に枯る水は凍る  
冬に枯る所は冬に枯る水は凍る  
冬に枯る所は冬に枯る水は凍る  
冬に枯る所は冬に枯る水は凍る  
冬に枯る所は冬に枯る水は凍る  
冬に枯る所は冬に枯る水は凍る

冬

冬

冬に枯る所は冬に枯る水は凍る  
冬に枯る所は冬に枯る水は凍る  
冬に枯る所は冬に枯る水は凍る  
冬に枯る所は冬に枯る水は凍る  
冬に枯る所は冬に枯る水は凍る  
冬に枯る所は冬に枯る水は凍る

冬

冬

冬

冬に枯る所は冬に枯る水は凍る  
冬に枯る所は冬に枯る水は凍る  
冬に枯る所は冬に枯る水は凍る  
冬に枯る所は冬に枯る水は凍る  
冬に枯る所は冬に枯る水は凍る  
冬に枯る所は冬に枯る水は凍る

冬

りたれぬありやこゝに野を照らす  
 とくもあつてあるは枯葉の枯葉  
 山ありや中への宿るこゝに葉の  
 水際ありやこゝに枯葉の香  
 をくくくくくくくくくくくく  
 酒にありや宿るこゝに枯葉の  
 影のこゝに宿るこゝに枯葉の  
 枯葉花  
 おくくくくくくくくくくくく  
 君の代りてはははははははははははは  
 くくくくくくくくくくくく  
 多更  
 多更

さしこゝに宿るこゝに枯葉花  
 悼貞松  
 うねりてはははははははははははは  
 枯蘆  
 枯草はははははははははははは  
 葉のこゝに宿るこゝに枯葉の  
 枯芒  
 一天のそとそとそとそとそとそと  
 枯葛  
 さしこゝに宿るこゝに枯葉の  
 枯葵  
 多更  
 多更

石落花

冠の葉より出く枯けし

馬矢

あつしし月おのこくくくく

冬丸

大根引

奥山よりはりくく大根曳

、

糸畑の早下りくくく古根ひく

、

あつしし大根ぬくく山の島

、

大根引お城のえめくくく

、

志智いふ

大根引志智く人義の掛い

、

千鳥

あつししあきくは千鳥

軍文

竹引くくくくく小おき

、

あつししあきくくくく

、

あつししあきくくくく

、

あつししあきくくくく

、

あつししあきくくくく

、

あつししあきくくくく

、

あつししあきくくくく

、

あつししあきくくくく

、

あつししあきくくくく

冬丸

あつししあきくくくく

、



あゝあゝきさく果てぬるなを  
みよあをふもげほあゝあゝ  
まゝまゝあゝあゝあゝあゝ  
川せきあゝあゝあゝあゝ  
ありあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

有明のこほあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

水鳥

水鳥を何ハあくるも中もあめ

あそびあはせ波らくも中もあめ

水鳥を何ハあくるも中もあめ

水鳥を何ハあくるも中もあめ

水鳥を何ハあくるも中もあめ

越中の國布施の所は船とくして

水鳥を何ハあくるも中もあめ

浮草

水鳥を何ハあくるも中もあめ

水鳥を何ハあくるも中もあめ

鴨

仲中也を何ハあくるも中もあめ

水鳥を何ハあくるも中もあめ

水鳥を何ハあくるも中もあめ

水鳥を何ハあくるも中もあめ

水鳥を何ハあくるも中もあめ

水鳥を何ハあくるも中もあめ

水鳥を何ハあくるも中もあめ

水鳥を何ハあくるも中もあめ

水鳥を何ハあくるも中もあめ

水鳥を何ハあくるも中もあめ

鴛鴦

拵あけ申す せしむるひらきし 系文

ついで羽の拵やあんなにせしむるひらきし 系文

せしむるひらきし せしむるひらきし 系文

おもしろいひらきし せしむるひらきし 系文

鷹

おもしろいひらきし せしむるひらきし 系文

木兔

ゆかり仲春下はせしむるひらきし

おもしろいひらきし せしむるひらきし

木兔や 何そしたれし せしむるひらきし

暖鳥

ぬくぬきしむるひらきし せしむるひらきし

冬鴛

候あはらむるひらきし せしむるひらきし

鳴

おもしろいひらきし せしむるひらきし

おもしろいひらきし せしむるひらきし

鷓鴣

竹伐せしむるひらきし せしむるひらきし

株のせしむるひらきし せしむるひらきし

せしむるひらきし せしむるひらきし

野中〜うお都中〜うお〜うお  
谷水〜うお〜うお〜うお  
蔓つ〜うお〜うお〜うお  
結構〜うお〜うお〜うお  
鳥鶴  
丸

綱代

松原〜うお〜うお〜うお  
綱代守〜うお〜うお〜うお  
〜うお〜うお〜うお〜うお  
〜うお〜うお〜うお〜うお  
綱代守〜うお〜うお〜うお  
更  
丸

夜具引

隣 掃〜うお〜うお〜うお  
夜具引  
落〜うお〜うお〜うお  
更  
丸

河豚

〜うお〜うお〜うお〜うお  
世の中〜うお〜うお〜うお  
海〜うお〜うお〜うお〜うお  
〜うお〜うお〜うお〜うお  
〜うお〜うお〜うお〜うお  
〜うお〜うお〜うお〜うお  
〜うお〜うお〜うお〜うお  
丸

鱈

乾鮭

鮭の干し魚を結ぶはりよ  
重しはる月拾うる魚の柄

一 策更

納豆

豆をけや家木のまじり  
乾鮭やききとれたるはりよ  
乾ききや漏れはるる

一 一 一

戎構

海産の糸をよこす  
一町乃くくくくくくく

一 一 一

十夜

芭蕉忌

海産の糸をよこす  
一町乃くくくくくくく

一 一 一

海産の糸をよこす  
一町乃くくくくくくく

一 一 一

海産の糸をよこす  
一町乃くくくくくくく

一 一 一

海産の糸をよこす  
一町乃くくくくくくく

一 一 一

翁居るこちのくわり松のむら  
あけいし

未山けつろささゆしふ時白  
りつけの水はらなぬささの植  
番ふら柑を植はるる式  
掃ふせし木をのぼるる  
系命式命の十の松を  
山仙也まじりておるる  
酒はるる  
安徳の松のむら  
十年の松のむら

ハ籠子集を

十とつ棒り木をおく  
義仲  
あつた松を  
ま向ふ松を  
赤く松を  
木鬼と松を

孟冬雑

矢田の松のむら  
冬の時や松のむら

新を月世のあやう故あは世不  
行旅の途をきこひ日影山は辺をさ  
に刺さるはあはちをわはひた  
とちとちも今もむうささかた  
は代のまうさあふ山もあは  
林も柳さううそ白はのたひもあ  
やううら紫英真うさうさ志ん  
あひもささう

刺さるはあはちをわはひた  
あはちも今もむうささかた  
は代のまうさあふ山もあは  
林も柳さううそ白はのたひもあ  
やううら紫英真うさうさ志ん

公水う新波よト居た故あはち

きりのりしは恒たやまはあはち  
能く水こひまうあまうむう尾花

霜月

そあ月やとの山えたるまらう

冬至

おああ辰うまうまうまうま  
山には柳竹もさう冬そうの

録

うはくうしはあはちさうま  
あはち強勸をほめもあはち

冬紀

千巻

軍度

子紀

子紀

子紀





冬椿

河津の東に有る川にありて  
花は北  
咲くも  
おとほまり  
そつと

葉食

つはりのやまき井とらりて  
菜食  
厚更

師趨

山は師走は果し  
雪まじ  
相の安は柳のまじふは  
まじ

儀ありは  
あつて  
まじ

歳暮

節季のや扇は紅い雪の舟  
果更

きく掃や路の落世のまじり川  
まじ  
隆まじりや果して花ぬ地の影  
まじ  
系なまじり移りまじり鬼のまじり  
果更  
田の中は雑つてまじりて年つまじ  
まじ  
踏まじり一息はくまじり  
まじ

り年終るやまじり  
版の山  
まじ

丙寅のまじり  
吉々と出で  
細果  
まじり  
まじり

まじり  
やけふ  
まじり  
少田の  
まじり  
年  
まじり  
まじり  
まじり

雑

燈も花もささるや大二十日 園更  
松風お掛乞ふも山 蒼和  
大さか風情の出るはりもさ  
妻や子れふしほしつる園さ  
おとまりけりてん除夜の柳の 子置  
有帆

車蓋の二聖お像を彫て御座のむと

乞ひ候ふ故箱の思ひを思ひ

月花の道や初んかき 吾更

或人の宿も

おとまり候も宿もあふ今も

不勢橋

晴まふちきいさなつ此きくら

七面奉納

有衣に針も数ある面うぬ

無季

客中

重水やとまよさうらまされ 園更

清しき物や山も新なる

子晴や竹も新なる日めし

送別

旅もささる七面所りもぬ

杖突版

あはれきせん杖突版のたし

上福坊

備向くややみそは神の教

善光寺

よらむくは家ふも法の光るん

中嶽

つらくと岩を神は杉の葉

金洞山

雲智心岩木の下乃松の影

日光

日影の日にうらも照守のまはる

江島

去うくや夕日の空をよけ

月もたゆむ白雲をよけ不二の形

くもつやもとも文殊もよめん

蒼乳

老れくま川をわたりて

くま川をわたりて

あまの心

あまの心人よこしむ神の山

あまの心人よこしむ神の山

あまの心人よこしむ神の山

冬之部畢

東山芭蕉堂故闡更翁為其中興而  
蒼虬翁千崖翁相繼而起世主此堂  
三翁才力皆足以風靡海內宜乎學  
俳歌者終歸於正風從是芭蕉堂之  
名愈著于天下矣然闡更蒼虬二翁  
之句出諸選及其集固多膾炙人口

但千崖翁多年漫游主此堂不如二翁之久且不及編其集而逝則傳世之句亦少矣於此六世之堂主公成翁為千崖翁傷其不幸且恐其句終致湮沒因集三翁句合刻而欲以傳之不朽也意不亦厚耶蓋公成翁予師友也予令二子雪螢可成從學故

此集錄之成徵跋於予，所以不辭而書耳

己未仲冬

芳麓

可樵

雪螢書

安政己未冬十一月新鑄

南無庵藏版

門人訂正

池永大書

彫工 松月堂魚助

製本 湖雲堂利助

